

認知症と発達障害の違い ケアマネジャーの視点を広げる

執筆 ▶ 近藤康寛 医療法人社団讃友会あべクリニック
東京都認知症疾患医療センター 副センター長
精神保健福祉士 公認心理師 社会福祉士

「大人の発達障害」という言葉が耳に慣れてきた昨今だが、高齢者支援の現場では、発達障害と認知症の区別がつかずに適切なケアに繋がらなかったり、本人が「分かってもらえない」と失望感を抱くケースがあるという。このような場合、支援者側も無力感を覚えることがあるだろう。正しい知識を身に着け、本人の個性に応じた支援をしたい。発達障害の基礎知識や認知症との違い、適切な支援について、東京都認知症疾患医療センターの副センター長であり、支援者や一般市民に向けて精神疾患や発達障害、認知症等の研修も多くしている近藤康寛さんが詳説する。

1. はじめに

「認知症とは違う独特な感じの高齢者を担当しています。身寄りはなく、サービス支援を提案しても拒否されます。どう支援したら良いでしょうか」。このような相談をケアマネジャーから受ける機会が増えています。2023年6月、認知症基本法が成立し、認知症に関する普及啓発が進んできている一方で、「高齢期の発達障害者（疑いを含む）」への支援においては、まだ多くの課題が残っています。どのような支援が必要で、どうかかわっていくべきか、精神科医療の最前線で私が経験してきたことも交えながら、共に視点を広げていきましょう。

2. 日本における発達障害の広がり

日本で「発達障害」という概念が認知されるようになったのは1970年のはじ

めです。2005年に「発達障害者支援法」が施行され、自治体の支援体制が整い、学校でも特別支援教育が推進されるようになりました。2013年のDSM-5¹⁾の影響を受け、徐々に「神経発達症」という言葉が専門家間で使われるようになりました。発達障害者支援法では引き続き「発達障害」という言葉が使われているため、本稿では、馴染み深い「発達障害」に表記を統一しています。

3. 高齢期の発達障害に関する課題

(1) ケアマネジャーが発達障害を学ぶ機会が少ない

高齢期の発達障害に対応するため、専門職向けの教育や研修の充実が必要です。近年、「大人の発達障害」が注目されていますが、高齢期の発達障害に関する具体的な解決策は示されていません。発達障害は幼少期や学童期の問題として扱われがちで、高齢者

支援の専門職が学ぶ機会は限られています。そのため、高齢期特有の支援が十分に提供されていません。今後、専門職の教育や研修を強化し、高齢期の発達障害に対応できる支援体制を整えることが重要です。

(2) ブラックボックス（支援の空白）

高齢期の発達障害への適切な支援には、障害特性の理解を深め、継続的な支援体制を整えることが重要です。発達障害は生まれつきの脳の特性によるもので、幼少期に支援を受けていても、成人期に入ると支援が途絶えることが多いと言われています。この支援の空白期間は「ブラックボックス」と呼ばれています。高齢期に介護保険サービスを受ける際、障害特性や支援歴が引き継がれず、記憶力や身体的問題に焦点が当てられることが多く、適切な支援を受けにくい状況があります。この空白を埋めるため、高齢期の発達障害への